編集後記

令和4(2022)年3月末に佐賀大学医学部を定年退任し，現在の勤務先（慈光会若久病院）の院長となってから約2年間が経過した．初めて常勤医になったのは院長になった令和4年4月からであるが，精神科医になった数年後の平成初頭より約30年以上ずっと現在の勤務先にはアルバイトに来ており，結果的に院内で一番古株の医師となった．定年退職後はできれば自宅の近くで精神科臨床を継続したいと考えていた一方で，講義室での多数の学生を相手にしての講義スタイルは必ずしも好きではなかったので，退職後に大学などの教員になることは全く考えていなかった．

そのようなわけで，退職後に現在の勤務先での常勤医としての勤務を希望したところ，当時は院長を兼務されていた現理事長から「こちらで院長になりませんか」と声をかけていただき，院長に就任することになった．現在の勤務先は昭和8（1933）年に福岡県下の精神科病院の草分けとして開設され，戦前からの長い歴史を有している．長年の懸案であった病棟の建て替えに関しては，令和4年4月に新館が竣工し，他の病棟も改装され，令和5（2023）年夏に新しい姿に生まれ変わった．おそらくは数十年に1回しかないと思われるこの時期に病院長の役割を担う巡り合わせに感謝しながら，先人が遺された精神科医療の輝かしい伝統を次の世代に正しくバトンタッチするべく，精進・努力を重ねたいと考えている．

現在の勤務先は民間病院なので，あるべき精神科医療を実践したうえで，収益性が強く要請されるのは当然のことである．大学教員暮らしが比較的長かっただけに，現在の勤務環境にすんなりとマインドを切り替えられるかどうかを聞かれることが時々あるが，約10年間，精神医学講座担当者であると同時に国立大学法人附属病院の精神科長をした経験からすると，現在の大学病院では収益性を考えずに科長を務められる状況では全くないのが実態である．無論，大学病院の病床数と民間病院の病床数（現在の勤務先は305床）とでは桁が違うのは承知のうえでの話ではあるが，収益性を常に意識する点では佐賀大学時代の経験はむしろ役立っているのではないかと思っている．医学部教授として教育・臨床・研究の「三本柱」に加えて，診療科長としての「経営」の要素を加えた「四本柱」をこなさなければならなかった佐賀大学時代の状況から，臨床，経営の「二本柱」の役割となった現在のほうが，考えようによっては楽？　なのかもしれない．ありがたいことに大学の現役教員を退いた後も，海外専門誌から査読依頼がくることがしばしばあるし，何しろ『精神神経学雑誌』の編集委員をしているおかげで，精神科のさまざまな分野での最新の知見に触れる機会も得ることができている．当面は体調面にも十分留意して，現在の仕事ペースを継続したいと考えている．

門司　晃